

# 協議会ニュース

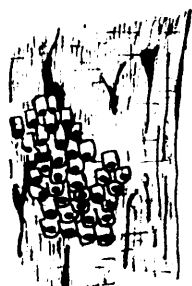
6号

愛知県自然観察指導員連絡協議会

59.1

◎ 愛知県のシンボルを知っていますか！	(東 義己) …… 1
{ 自然を知るために }	
・ 鳥の渡りについて	(竹田 要) …… 3
{ フィールドガイド }	
・ 富具神社及び富具岬	(知多支部) …… 5
{ 考えてみよう }	
・ 進歩と調和	(鈴木 清) …… 7
・ 自然観察指導員とは	(辻 伸夫) …… 9
◎ 行事報告	… 10
◎ 行事案内	… 11
◎ 刊行物案内	… 2
◎ 事務局から、会員移動	… 11

〔昆虫の冬越しのようす〕



クスサンの卵(クリの幹)



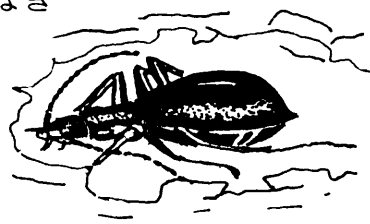
アゲハの  
さなぎ



イラガのまゆ



カブトムシの幼虫  
(腐植土の中)



ヒメマイマイカブリ  
(くち木の中)

## 愛知県のシンボル（県の木、県の花、県の鳥）を

知っていますか！

東 義己 （名古屋市）

国花は、日本の国民が愛好するサクラと皇室の紋章であるキクが用いられている。国鳥は、1947年にキジが選定された。（講談社・現代世界百科大事典）

それでは、愛知県の場合はどうであろうか。

- ・ハナノキ……愛知県を中心とする中部地方に自生するカエデ科の落葉樹で、春に赤い小さな花がたくさん咲きます。北設楽郡豊根村「川宇連のハナノキ自生地」は天然記念物に指定されています。昭和40年の県民投票により選定されました。
- ・コノハズク……アジア、ヨーロッパ、アフリカに分布するフクロウ科の渡り鳥で、「声のブッポウソウ」と呼ばれています。南設楽郡鳳来町の鳳来寺山は、その鳴き声の名所として有名です。昭和40年に県民投票で選ばれました。
- ・カキツバタ……昔から愛知県にゆかりのある花で、在原業平朝臣が現在の知立市を訪れたとき、この花の美しさに旅情をなぐさめ、カキツバタの五字をよみこんで歌をつくったと伝えられています。（伊勢物語）昭和29年に郷土の花として選定されました。

（愛知県広報より）

我が愛知県を代表するこれらの木、花、鳥がどの程度県民に知られているかを調査してみた。

調査方法は、職域で男女10代から50代までの100名（愛知県民）を無作為で面接して、5者択一方式で各対象ともいずれか1つを選択してもらった。結果は別表のとおりである。

表の中で興味深いのは、県の木ではクスノキ（名古屋市の木）が32%と、ハナノキを7%も上回ったことである。解答者の意識では、杜寺林に多いクスノキや街路樹などによく見られるイチョウが一番身近に感じられるため誤ったのだと考えられる。

鳥では、コノハズクの正解者が43%と最も多く、ツバメ（9%）、スズメ（13%）を合せたより上回っているのは、一般的でポピュラー

な鳥は県の鳥としてふさわしくないと思ったのだろうか。

花では、やはりカキツバタが54%と知名度が高く、広く県民に知られている。各年代とも正解者が最も多くなっている。

今回の調査結果から判断すると、カキツバタとコノハズクは、一応県民に知識として浸透していると言えよう。ハナノキは、知名度においてあと一歩と思われる。それには、広報の必要性も高いが、同時にうるおいのある郷土づくりに県民が参加するという心構えも大切であると考えた。

◎調査結果表

	県の木は？					県の鳥は？					県の花は？				
種 名	ク	ハ	イ	シ	ツ	ケ	モ	ツ	ス	コ	レ	キ	シ	カ	ス
	ス	ナ	チ		バ					ノ	ン	キ	ラ	キ	ミ
	ノ	ノ	ヨ					バ	ズ	ハ	ゲ	ウ	リ	ツ	
	キ	キ	ウ	イ	キ	リ	ズ	メ	メ	ズ				バ	レ
										ク				タ	
10代 (31名)	11	6	8	1	5	3	11	4	6	7	1	2	1	17	10
20代 (23名)	3	7	8	2	3	1	7	3	0	12	2	4	1	11	5
30代 (23名)	9	5	6	2	1	1	6	1	2	13	2	5	1	12	3
40代 (10名)	4	4	1	0	1	0	1	0	2	7	1	1	2	6	0
50代 (13名)	5	3	4	0	1	0	5	1	3	4	4	0	0	8	1
全体 %	32	25	27	5	11	5	30	9	13	43	10	12	5	54	19

調査：昭和59年1月3日～10日

〔刊行物案内〕

- ・「名古屋 バードマップ」 発行：名古屋市農産課 （事務局にある）  
市の野鳥目録、10カ所の観察地の紹介
- ・「矢作川下流の植物」 高瀬和之著（会員） 1982年発行 106P  
概況、植物目録、100種の図
- ・「理科検索表」 発行：下伊那教育会自然研究紀要編集委員会 194P  
動植物、地質の分類方法をまとめたもの （事務局で購入）  
1000円＋送料

紅葉が深まり、雁の渡りで冬の気配を感じる。春が来ると冬の間見られなかった鳥が出現し、秋になると再び姿を消すことは、春にツバメが南の国から渡来し、雁が北の国へ渡去することとともに、古くから知られていた。しかし、昔は冬の間鳥がいなくなるのは水中や土の中、木の洞穴で冬眠するものだと信じていた時代もあった。

渡り鳥は世界の鳥の3分の1以上の種類で、その総数は数百億羽以上に及んでいる。渡りとは、鳥がよりよい快適な自然環境を求めて移動することである。そして、このことは鳥類の進化の過程で、遺伝的に固定された行動である。渡り鳥は遠く離れた繁殖地と越冬地を定期的に移動するもので、一般的には、春は北上して繁殖地へ、秋は南下して越冬地へ渡っていく。陸上を飛ぶ時は、多くは海岸線とか大きな川、山ひだなど、上空から見える地形に沿って飛ぶものである。

渡り鳥は、渡りの状況により、夏鳥、冬鳥、旅鳥、漂鳥に分類されている。夏鳥は、日本が繁殖地で、東南アジア諸島、フィリッピン、ボルネオ、スマトラ、遠くはインド、オーストラリアなどで越冬する。冬鳥は、日本が越冬地で、繁殖地はシベリア、アラスカなどである。ともに立夏、立冬をさかいに渡来し、そして渡去する。夏鳥は4500～6000kmを、冬鳥は2000～3000kmを年に2回移動しているのである。

旅鳥は、繁殖地がサハリン、千島列島、カムチャッカ、シベリア、アラスカで、越冬地がフィリッピン、ボルネオ、スマトラ、ニューギニア、オーストラリア北部で渡りの途中春と秋に日本に立ち寄るものである。漂鳥は、国内を短距離移動するもので、山里で繁殖し、温暖な平地で越冬するものが多い。

主な鳥をあげると、ツバメ、サシバ、アオバズク、キビタキ、ヨシゴイは夏鳥、ツグミ、アトリ、ジョウビタキ、ユリカモメ、ガン類、カモ類は冬鳥、エゾビタキ、ムキマキ、ツバメチドリ、シギ類は旅鳥、ウグイス、ケリ、コサギは漂鳥である。

春の渡りはその繁殖地に対する帰巢本能であり、秋の渡りは冬の寒さと食物の欠乏による本能的な移動と考えられる。そして、成鳥より幼鳥

の方が渡り本能が強く、渡りの出発が早い。また、温暖な地方で繁殖する渡り鳥の方が本能の強さがまちまちである。これらのことについては、春と秋との脂肪蓄積という生理的リズムにも関係が深い。春は気温の上昇と長日による採餌量の増加で、渡り前の体重は急に増え、脂肪の蓄積も急増する。秋は、成鳥では換羽を終了し、幼鳥は成長期を終って、共にエネルギーが貯えられるからである。渡りは本能と生理的現象があわさって飛翔できる。

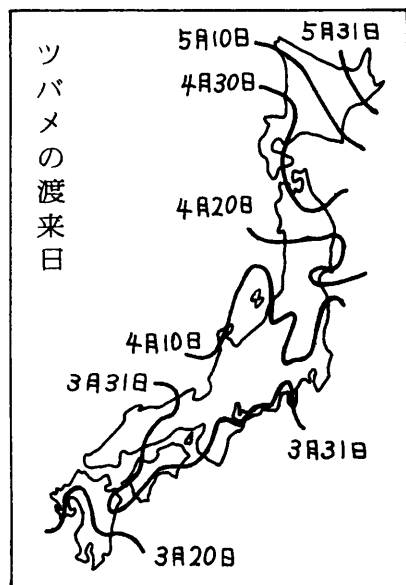
渡り鳥は昼間渡る種類と夜間渡るもの、昼夜をとわずに渡るものがある。昼型はツバメ、ヒヨドリ、カケス、サシバ、モズ類、ヒワ類などで、夜型はツグミ、ヒタキ、ウグイス、ホトトギス、シギ、ガン、ハクチョウ類などである。一般的には、夜間渡るものが多く、昼間渡るものは飛翔力が強い、力の強い鳥である。昼夜をとわず渡るものにはアオサギやカモ類がいる。夜間の渡りで、方向の判定は星座を航空標識として使っている。そのため、渡りは晴天にみられ、曇天の時は中止する。また、天体の位置の変化を調整する能力もそなわっている。さらに、春は南風、秋は寒冷前線、北西風などとの関連もある。

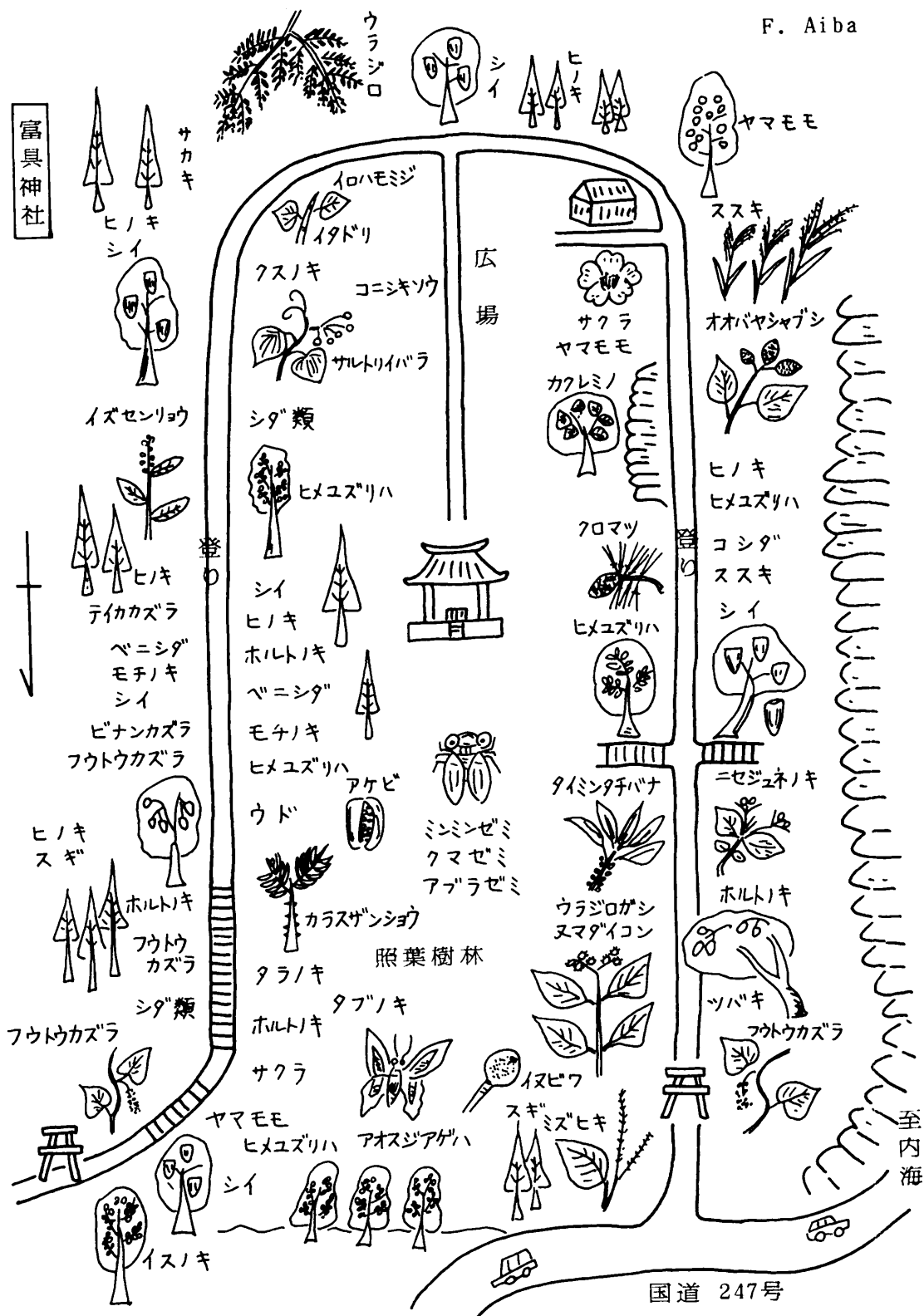
渡りの高度は、小鳥類の場合は 100m 位、シギやチドリ類では 1000～2000m、ガン類では 2500m、ハイタカは 1000m 位と知られているが、頻繁に渡りが行われるのは 800～1000m 位である。そして、陸性の鳥は海上では高く飛び、海鳥は逆に低いところを飛ぶ。

渡り鳥は、単独で渡るものと、群れで渡るものがある。一般的には群れで渡る鳥が多く、ガン・カモ類、シギ・チドリ類、ヒヨドリ、カケス、ツグミ、アトリなどが知られている。単独で渡るものには昆虫食の鳥が多く、ジョウビタキ、オオルリ、キビタキ、ヨタカ、モズ類がある。

そして、春繁殖地へ向う渡りは速く、秋に越冬地へ移動するのは春より遅いものである。

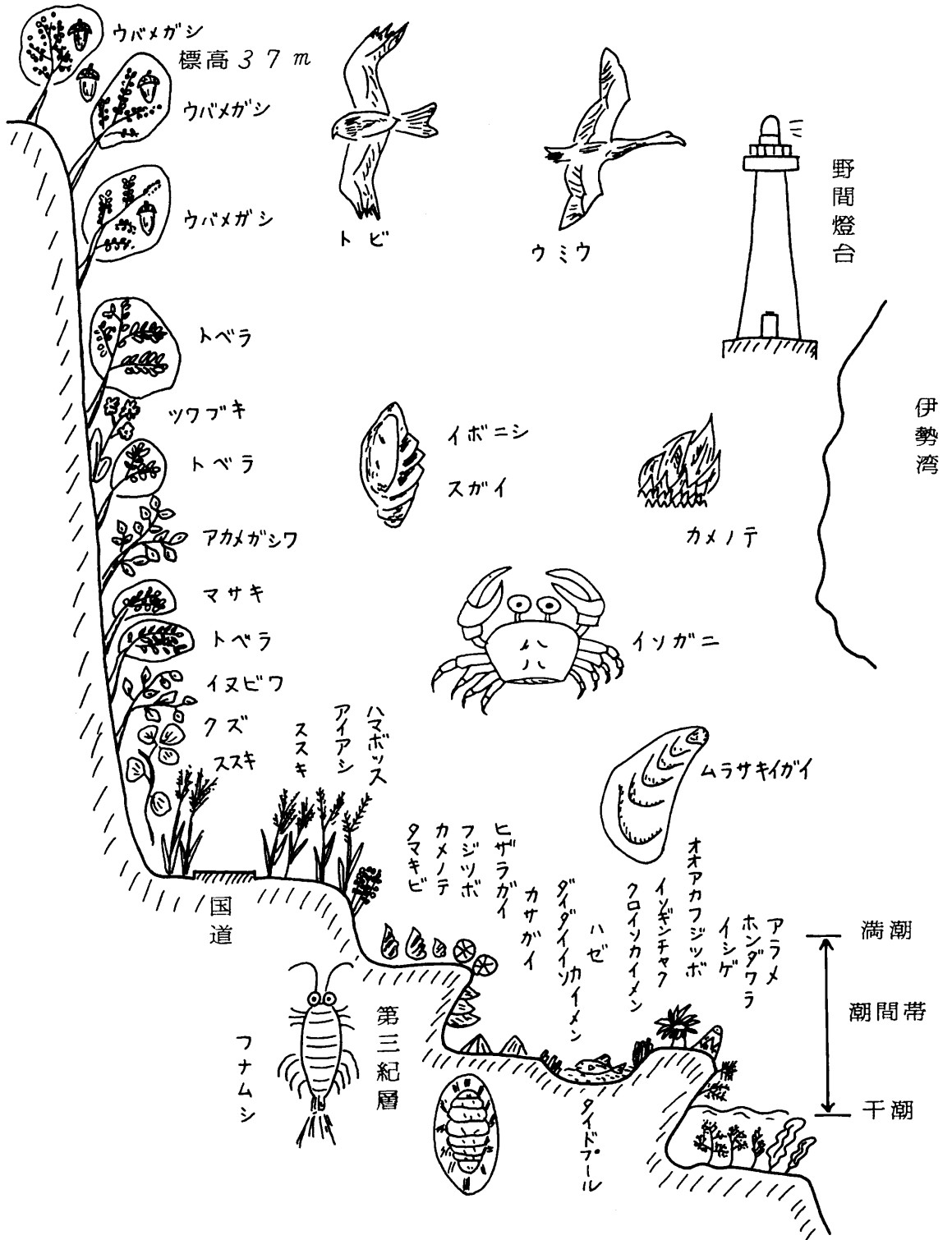
以上が野鳥の渡りについての一般論である。





富具海岸

F. Aiba



「水は生命を連れてきた」流れる水は植物を呼び、よどむ水は小鳥を楽しませ、水と空気と緑は愛をも育てた。この貴重な「水」、水は早く海に返すべきではない。できるだけエネルギーの転換を計り、多角的に利用すべきだ。才知を結集して水を活用し、生物たちのつながりのもとに、危害を加える要素をろ過して、満々とたたえたい。

温度は動物達の動きを指示し、春から冬までの一年の歴史を生き物達に刻み込む。大きな時の年輪は、豊橋港を校区に持つ神野新田・牟呂地区にも刻み始めた。ここは汐川干潟と内海を挟んで対岸にあたるため多くの水辺の鳥が飛来し、その数5千羽とも1万羽ともつかぬカモ、シギ、チドリが翼を休める。十月すでにスズガモ、マガモを紹待した。この恵まれた地形、環境は、まさに水辺の鳥にとっては、ねぎらいの地であり、オアシスとなっている。この見事に貯わえられた自然をより多くの人に知ってもらうために、自然観察パトロール隊を学校内に設置し、毎週土曜日の午後実施して、校内にもアピールしてきた。野鳥を愛する心を育成するために、野鳥の巣箱作りや架設、給餌活動、野鳥描写、野鳥の生態調査などを追々進めた。

牟呂地区は水郷であり、産業は牟呂用水による稲作や海浜漁業が中心であり、冬期は田畑に塩分が湧出するため作物生産は困難である。よって清流を導水する養 業が自然発生的に企画され、郷土の産業をになうようになった。養 池は散在するが、自然観察パトロールが実施されるにつれて、新たな事実が明らかになってきた。はじめは、これらの池の周りに群がるコサギ、トビ、ミサゴ、ゴイサギ、カワウ、カイツブリ等は自然を構成する一員と、好感がもたれた。ところが、うなぎをつかんで飛ぶ鳥、くちばしにはさんでのみこむ姿等々、一日中目撃していると、野鳥と農家の人々の心が手にとるように浮きぼりになり、心の中がすっきりしなくなってくるのを覚えた。パトロールは野鳥保護の立場をとりながら、生活をおびやかすこれらの野鳥について、保護保全と生活権の問題で板ばさみとなり、解けぬ難問でも手がけなければならない。

自然を守ることの大切さ、自然のバランスを保つことの必要性をつく



づく感じながら、所々で線香花火のように悩みを打ちあける小さな問題点に耳をかさなければならない。

パトロールが進むにつれ、新事実がとびこんできた。野鳥追い払いのため、水辺の鳥が「さらし首」となって池のほとりにぶらさがり、池をおおった網には、足をからめたコアジサシが水面に首をつっこみ逆づりしていた。又ある時は、池の片隅に飼育？されて騒いでいる水辺の鳥がおり、いよいよ知恵くらべが始まった。この地区の自然は誰れが守り、誰れが保護するのか？。海の玄関「豊橋港」では、ノ万吨級の入港が可能となる西ふ頭増設が急ピッチで進められ、しゅんせつ船が活躍し、その土石流の中の小動物を求めてアオサギ、ゴイサギ、ウミネコ、カワウが数百羽群らがり共存している。しかし、建設のつち音は高らかであるが、渚はコンクリート化し、ここから野鳥を締め出してしまうのは時間の問題である。

この自然を構成する者達はいかに弱いものばかりである。これらの自然をこわすことは簡単であるが、作り上げることは実に困難である。一度絶滅した生物は二度とその姿を見る事はできないだろう。「進歩があれば調和はくずれる」「調和があれば進歩が伸びなやむ」。「進歩と調和」を守り続けることはできないものだろうか。パトロール中に湧出した数々の問題点を背負いながら、「確かな自然」「かけがえのない自然」を次の世代に残すためには、悔む前に今やれるだけの事はしておくことだ。今からでも決して遅くはないのだ。

本物の自然は、人間の手では作れない。またその自然は「金」で買うことができない。保全保護とリズムをつけて太鼓をたたいてばかりはおられない。具体的に一つずつ進めなくては、あるべき宝石を失ってしまい、とり返しのつかないことになってしまう。ファールは「蜂は蜜を吸う時花をいためない。」という。緑の地球はこうでなければならない……と思うのだが……。

---

〔伝言板〕

- ・天候、気候に関することわざや地域の言い伝えがありましたら教えてください。また、それについての文献等も御教示ください。

高瀬和之 (西尾市末広町 45 ☎05635-7-4386)

自然観察指導員になる前にも、いろいろな観察会に参加をしたり、また自分が引卒者になるような観察会をして感じたことは、私たちも素人であり、参加する子供達やその親たちも自然の中へ行くことは好きだが、何をどう見たらよいかわからない……という人が多いようです。

せっかく自然に親しんで、何か／＼位発見をして帰りたいと意気込んで来た参加者も、その場の説明があまり専門的すぎたら、とっつきにくくなってしまいます。一方、観察会へ何回も来ている人には、あまり初歩的なことではつまらないということになります。

私達が引卒する会では、引卒者全員が素人ですが、参加者といっしょになって調べて、考えて、当然その場で答の出るものではありませんが、参加者も私達もその時見る自然にいっしょになって驚ろき、自然の不思議さを味わっているのです。子供達も「ほんとうに自然ってすばらしいなあ」と感心しています。

自然のしくみの巧妙さを、子供達が見落して帰ることのないように、私達はそのポイントを上手に発見できるようにならなくてはいけないと思うのです。でも、それら自然の巧妙さがなぜ起るのか、そのメカニズムは……などは専門家の研究課題であって、どうてい私達や観察会の参加者などにわからないでしょうが、自然に対する驚きだけは常に新鮮です。

この自然のすばらしさを野外で子供達に味わわせてやれば、きっと家に帰ってすぐに図鑑などで、見た生物について食い入るように調べることでしょう。生き物に対する興味がここから始まるのだと思います。

夏休みなどには、多くなる家族連れが、野山へ遊びに出かけます。みんな自然が好きな人に違いありません。しかし、森などへ行っても、都会的な遊びをして帰って来るケースが多いと思います。これはもったいないことです。せっかく自然にひたっても、都会的な騒々しい遊びしかできないのでは……。

こういう所に、自然の親しみ方や自然のすばらしさを知らせることのできる指導者がいたなら、多くなる人たちが自然の良さを見つけて帰れることでしょう。

こうしたときも、専門的な自然の研究者でない素人くささを残した、しかし自然に深い関心を持った指導者が一番適切かと思います。自然観察指導員は、ちょうどそんな専門家と素人との中間的な存在として、活動する者であるといえましょう。

最後に、いま私が一番学びたいことは、自然の景観の中からテーマを見つけ、観察するポイントを見つける技術とそれらを子供達に教える方法です。答は出せずとも、みんなといっしょに考えるきっかけ（材料）のつかみ方です。

---

### 〔 行 事 報 告 〕

#### 58. 12. 10 役員会（3役、各支部代表） 於中小企業センター

59年度事業及び2月の総会について検討。次年度事業案としては

- ・ 自然観察会：各支部2回以上、全体として / 5回位実施
- ・ 調査：58年度に引続き、シイ・カシ、セミ、カワセミについて
- ・ 観察技術等の研究：各支部 / テーマ
- ・ 自然保護について考える会：3つ位の具体的なテーマについて実施
- ・ すぐれた自然を見る会：3回程度（紀伊長島他）
- ・ 研修会：一般研修2回、特別研修 / 回（ / 泊）
- ・ 機関紙の発行：4回程度

#### 59. 1. 21 企画運営委員会 於名古屋市公会堂会議室

58年度に実施した自然観察会の反省及び県への実績報告について。

自然観察会の反省と課題としては

- ・ 広報手段を検討し、多くの人を集めることのできるようにする。特に地元の人の参加が少ない。
- ・ / 日行程の観察会では、参加者にコース、持物等の詳細を伝える。
- ・ 班分けを年令、経験により行うことも検討すべき。
- ・ 今年は初めての観察会であったため、目につくものすべてを教えようとする傾向があった。テーマをうまく設定して印象的に行うべき。
- ・ テキストを早めに作って、十分検討し、利用しやすいものとする。
- ・ 指導者は一部の者に片寄らぬよう、多数の出席を期待する。
- ・ 私たちの行う観察会は、物見遊山的なものでないようにしたい。

〔 行 事 案 内 〕

期 日	主 催	内 容	備 考
59 2. 5	名古屋支部	総会 例会「アフリカの自然保護」	中小企業センタ ー 13:20～
2.19 (日)	尾張支部	自然観察会（例会） （犬山市継鹿尾）	犬山遊園駅集合 8:30
2.26 (日)	協議会	学校教育における自然観察の 研究会	県産業貿易館 10:00～
2.26 (日)	協議会	総会及び研修会 「里山の保護と動物調査」	県産業貿易館 13:15
3.14 (水)	名古屋支部	例会 「屋久島の自然」	
3.25 (日)	尾張支部	自然観察会（例会） （犬山市継鹿尾……予定）	犬山遊園駅集合 8:30

〔 事 務 局 か ら 〕

- ◎ 「緑の国勢調査」の調査員依頼のパンフレットが各会員に送付されています。これは5万分の1地図を単位（何枚分でも可）として、70種の動植物について調査するものです。（調査ポイント及び対象種は自分で限定できます。）御協力ください。なお、調査結果（59年末）の送付は協議会経由とし、県レベルでもデータを蓄積したいと考えています。
- ◎ 愛知県での第1回の指導員講習会（於県民の森）の受講生の方は、指導員資格の更新手続の書類が送付されています。3月/日迄に日本自然保護協会へ申請してください。もし、書類の来ていない方がありましたら佐藤迄御連絡ください。
- ◎ 協議会ニュースの発行が遅れており、申し訳ありません。次は3月に発行します。

〔 会 員 移 動 〕

（加入）古屋晶子 美浜町奥田南大西 27 メゾン大西 205号 知多支部  
470-32